

# 神奈川県立大和高等学校

## 万葉樹木園資料

### 【目次】

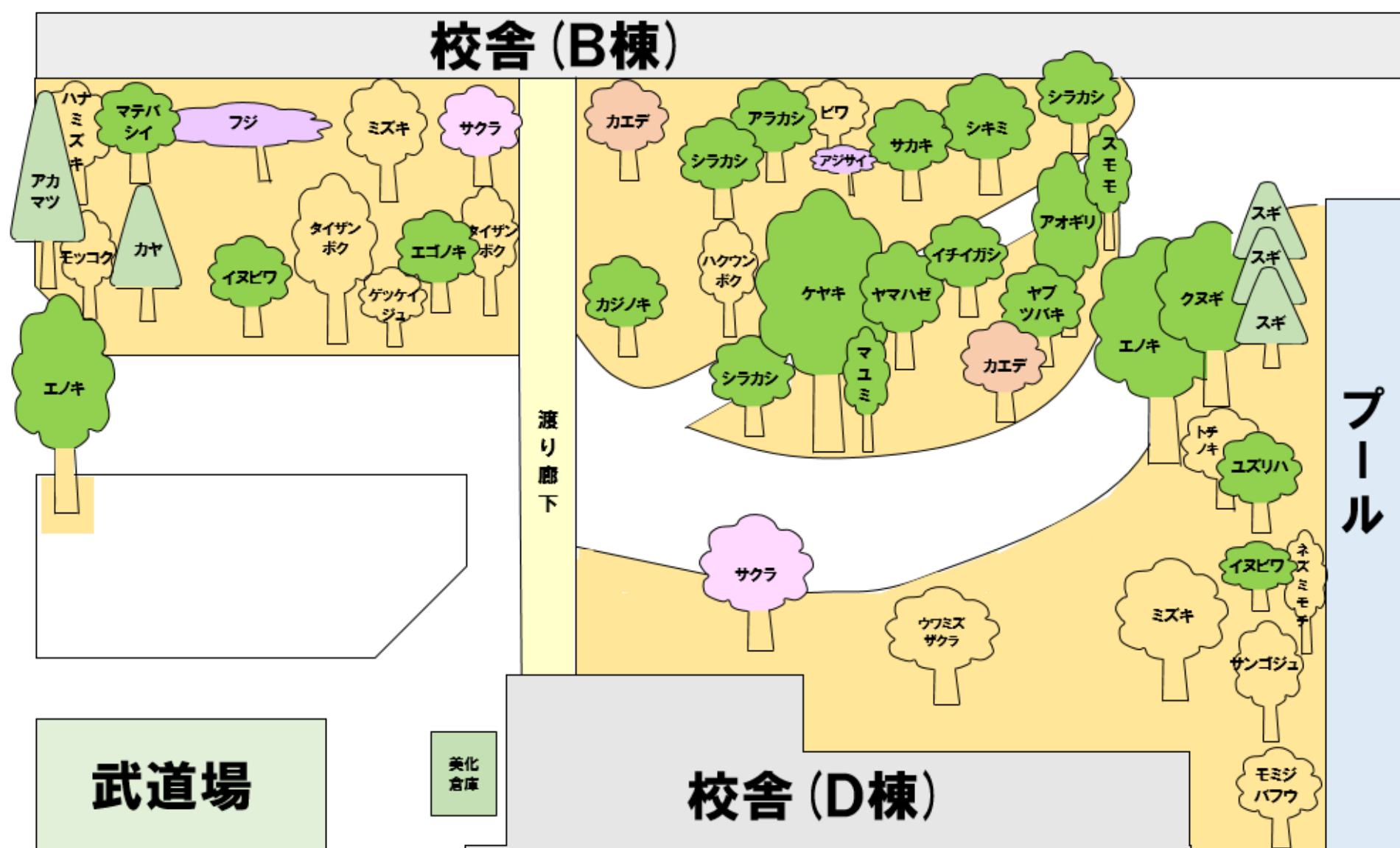
万葉樹木園樹木分布図

万葉樹木と万葉集の歌

大和高校敷地内に植栽されているその他の万葉樹木

発行 令和2年6月

## 万葉樹木園 樹木分布図





「万葉樹木と万葉集の歌」

凡例

和名（現代名） 写真

万葉歌 ◎原文（万葉仮名） ▽訓み下し文

◆現代語訳 作者（巻・番号）



まつ。松（アカマツ）

◎磐白乃 濱松之枝乎 引結 真幸有者 亦還見武

▽岩代の 浜松が枝を 引き結び ま幸くあらば またかへりみむ

◆岩代の浜松の枝を引き結んで、幸いに無事であつたら、また帰つて来て見ることであろう。  
有間皇子（巻二―一四一）



かへ。松柏（カヤ）

◎霍公鳥 来喧五月尔 咲尔保布 花橘乃 香吉 於夜能御言 朝暮尔

不闻日麻祢久 安麻射可流 夷尔之居者 安之比奇乃 山乃多乎里尔

立雲乎 余曾能未見都追 嘆蘇良 夜須家奈久尔 念蘇良 苦伎毛能乎

奈吳乃海部之 潜取云 真珠乃 見我保之御面 多太向 将見時麻泥波

松栢乃 佐賀延伊麻佐祢 尊安我吉美 御面謂之美於毛和

▽ほととぎす 来鳴く五月に 咲きにほふ 花橘のかぐはしき 親の御言 朝夕に 聞かぬ日まねく

天離る 鄙にし居れば あしひきの 山のたをりに 立つ雲を よそのみ見つ 嘆くそら

安けなくに 思ふそら 苦しきものを 奈吳の海人の 潜き取るといふ 白玉の 見が欲し御面

直向かひ 見む時までは 松柏の 栄えいまさね 尊き我が君 御面、これを「みおもわ」と謂ふ

◆ホトトギスが来て鳴く五月に美しく咲く花橘のように、香り高い親の御言葉を、朝夕に聞かない日が久しく、田舎にいるものですから、山の窪みに立つ雲を遠く見るばかりで、嘆く気持ちも安らかでなく、思う気持ちも苦しいものですが、奈吳の海人が潜って取るという真珠のように、見たいと思うお顔を、向かい合って見る時までは、（松柏の）瑞々しくいらっしゃってください。大切なお母上。へ「御面」は「みおもわ」と言う。

大伴家持（巻一九―四一六九）





◎藤浪之 花者盛尔 成来 平城京乎 御念八君

▽藤波の花は盛りにになりけり 奈良の都を思ほすや君

◆藤波の花は盛りになりました。奈良の京のことを思い出されますか。あなたは。

大伴四綱(巻三—三三〇)



◎足比奇乃 山櫻花 日並而 如是閑有者 甚戀目夜裳

▽あしひきの 山桜花 日並べて かく咲きたらば はだ恋ひめやも

◆山の桜の花が、これから何日も今のように咲いているのなら、こんなにひどく心惹かれることはないだろうに。

山部赤人(巻八—一四二五)



◎知智乃實乃 父能美許等波

播蘇景乃 母能美己等

於保呂可尔 情盡而 念良牟

其子奈礼夜母 大夫夜

无奈之久可在 梓弓

須惠布理於許之 投矢毛知

千尋射和多之 劔刀 許思尔

等理波伎 安之比奇能

八峯布美越 左之麻久流

情不障 後代乃

可多利都具倍久

名乎多都倍志母

▽ちちの実の 父の命柝は はそ葉の 母の命 おほろかに 心尽して 思ふらむ その子なれや  
もますらをや 空しくあるべき 梓弓 末振り起こし 投矢持ち 千尋射渡し 劔大刀 腰に  
取り佩き あしひきの 八つ峰踏み越え さしまくる 心障らず 後の世の 語り継ぐべく  
名を立つべしも

◆(ちちの実の)父君が、そして(ははそ葉の)母刀自が、おざなりな心の痛めようで思う、そんな子どもであるものか。ますらおたる者は、ただ何の手柄もなしでいいものだろうか。梓弓の弓末を振り起こして、投矢を手に持って千尋の遠くまで射通し、劔大刀を腰にさして、(あしひきの)たくさん尾根を踏み越え、下命をうけたその志を押し通して、後世の人々が語り継ぐように、高い名を立てるべきだろう。

大伴家持(巻一九—四一六四)





ちさ

(エゴノキ)

◎氣緒尔 念有吾乎 山治佐能 花尔香公之 移奴良武

▽息の緒に 思へる我を 山ぢさの花にか君が うつろひぬらむ

◆命かけて愛している私なのに、山ぢさの花のように

あなたは心が移ってしまったのであろうか。

作者不詳(巻七一三六〇)



え。榎

(エノキ)

◎吾門之 榎實毛利喫 百千鳥 こゝ者雖来 君曾不来座

▽我が門の 榎の実もり食む 百千鳥 千鳥は来れど 君ぞ来まさぬ

◆我が家の門の榎の実をついばむ百千の鳥、数多くの鳥は来るけれども、あなたは

お出でにならない。

作者不詳(巻一六一三八七二)



かえるで

(カエデ)

◎吾屋戸尔 黄變蝦手 毎見

妹乎懸管 不戀日者無

▽我がやどにもみつかへるて 見るごとに

妹をかけつつ 恋ひぬ日はなし

◆我が家の庭に色付く楓を見るたびに、

あなたを心に掛けて恋しく

思わない日はありません。

田村大嬢(巻八一六二三)



たく。栲

(カジノキ)

◎多久夫須麻 新羅邊伊麻須 伎美我目乎 家布可安須可登 伊波比豆麻多牟

▽栲衾 新羅へいます 君が目を 今日か明日かと 齋ひて待たむ

◆(栲衾)新羅へ行かれるあなたに逢える日を、今日か明日かと潔齋して待ちましょ

う。

作者不詳(巻一五一三五八七)





しらかし・白樫

(シラカシ)

◎足引 山道不知 白牝牝 枝母等乎尔 雪落者

▽あしひきの 山路も知らず 白樫の 枝もとををに 雪の降れば

◆山道も分からない。白樫の枝もたわむほどに雪が降っているの。

柿本人麻呂歌集(巻一〇―二三―五)

◎遠来而母 見手益物乎

山背 高槻村 散去奚留鴨

つき。槻

▽早来ても 見てましものを

(ケヤキ)

山背の 高の槻群 散りにけるかも

◆もっと早く来て見れば良かったのに、

山背の 高の槻の木立の黄葉はもう全部散って

しまった。

高市黒人(巻三―二七七)



さかき。賢木

(サカキ)

◎久堅之 天原後 生来 神之命 奥山乃 賢木之枝尔 白香付

木綿取付而 齋戸乎 忌穿居 竹玉乎 繁尔貫垂 十六自物

膝折伏 手弱女之 押日取懸 如此谷裳 吾者祈奈牟

君尔不相可聞

▽ひさかたの 天の原より 生れ来たる 神の命 奥山の 賢木の枝に しらか付く

木綿取り付けて 齋瓮を 斎ひほりすゑ 竹玉を しじに貫き垂れ 鹿じもの

膝折り伏して たわやめのおすひ取りかけ かくだにも 我は祈ひなむ

君に逢はじかも

◆高天の原以来生まれ継いで来た神々様よ。奥山の賢木の枝に木綿を取り付けて、

齋瓮を土に穴を掘って据え付け、竹玉を緒にびっしりと貫いて垂らし、鹿のように

膝を折って拝み、手弱女として、襲を身体に掛けて、ただこんなにまでして祈ってい

ましよう。それなのにあなたに逢えないのでしょうか。



大伴坂上郎女(巻三―三七九)





かし。榎

(アラカシ)

◎級照 片足羽河之 左丹塗 大橋之上従者

紅衣裳數十引 山藍用揩衣服而 直獨 伊渡為兒者

若草乃 夫香有良武 榎實之 獨歟將宿 問卷乃

欲我妹之家乃不知久

▽しなてる 片足羽川のさ丹塗りの 大橋の上ゆ 紅の赤裳裾引き 山藍もち摺れる  
衣着て ただひとり い渡らす児は 若草の 夫があるらむ 榎の実の ひとりか寝ら  
む 問はまくの 欲しき我妹が 家の知らなく

◆片足羽川の赤く塗った大橋の上を、紅染めの赤い裳裾を引き、山藍で摺り染めにし  
た衣を着て、ただひとり渡って行かれるあの乙女は、夫があるのだろうか、それとも  
(榎の実の)ひとりで寝ているのだろうか、問いかけてみたいあの乙女子の家も分か  
らないことよ。

作者不詳(巻九―一七四二)

はじ。榎 (ヤマハゼ)

◎比左加多能 安麻能刀比良伎 多可保乃 多氣尔阿毛理之 須賣呂伎能 可求能御代欽  
利波自由美乎 多尔藝利母多之 麻可胡也乎 多婆左美蘇倍豆 於保久米能 麻須良多神乎  
と 佐吉尔多豆 由伎登利於保世 山河乎 伊波祢左久美豆 布美等保利 久尔麻藝之都  
知波夜失流 神乎許等年氣 麻都呂倍奴 比等乎母夜波之 波吉伎欲米 都可倍麻都里豆  
安吉豆之萬 夜萬登能久尔乃 可之波良能 宇祢備乃宮尔 美也婆之良 布刀之利多豆氏  
安米能之多 之良志賣之祁流 須賣呂伎能 安麻能日継等 都藝豆久流 伎美能御代と  
加久左波奴 安加吉許己呂乎 須賣良弊尔 伎波米都久之豆 都加倍久流 於夜能都可佐  
等許等大豆氏 佐豆氣多麻敵流 宇美乃古能 伊也都藝都岐尔 美流比等乃 奇多里都藝  
豆氏 伎久比等能 可我見尔世武乎 安多良之伎 吉用伎曾乃名曾 於煩呂加尔 己許呂  
母比豆 牟余許等母 於夜乃名多都余 大伴乃 宇治等名尔於敵流 麻須良乎能等母  
ひさかたの 天の門開き 高千穂の 岳に天降りし 皇祖の 神の御代より はじ弓を 手握り持たし 真鹿子矢を  
手挟み添へて 大久米の ますら健男を 先に立て 鞆取り負ほせ 山川を 岩根さくみて 踏み通り 国求ぎしつ  
ちはやぶる 神を言向け まつろへぬ 人をも和し 掃き清め 仕へ奉りて あきづ島 大和の国の 榎原の 畝傍の宮に  
宮柱 太知り立てて 天の下 知らしめしける 皇祖の 天の日継と 継ぎて来る 君の御代御代 隠さはぬ 明き心を 皇辺に  
極め尽して 仕へ来る 祖の職と 言立てて 授けたまへる 子孫の いや継ぎ継ぎに 見る人の 語り次てて 聞く人の  
鏡にせむを あたらしき 清きその名ぞ おぼろかに 心思ひて 空言も 祖の名絶つな 大伴の 氏と名に負へる ますらをの伴。

▽ひさかたの 天の門開き 高千穂の 岳に天降りし 皇祖の 神の御代より はじ弓を 手握り持たし 真鹿子矢を  
手挟み添へて 大久米の ますら健男を 先に立て 鞆取り負ほせ 山川を 岩根さくみて 踏み通り 国求ぎしつ  
ちはやぶる 神を言向け まつろへぬ 人をも和し 掃き清め 仕へ奉りて あきづ島 大和の国の 榎原の 畝傍の宮に  
宮柱 太知り立てて 天の下 知らしめしける 皇祖の 天の日継と 継ぎて来る 君の御代御代 隠さはぬ 明き心を 皇辺に  
極め尽して 仕へ来る 祖の職と 言立てて 授けたまへる 子孫の いや継ぎ継ぎに 見る人の 語り次てて 聞く人の  
鏡にせむを あたらしき 清きその名ぞ おぼろかに 心思ひて 空言も 祖の名絶つな 大伴の 氏と名に負へる ますらをの伴。

◆「天の岩戸を開いて、高千穂峰に天下った、皇祖たる神の御代以来、榎弓を手にお持ちにな  
り、真鹿児矢を手に挟んで添えて、大久米のますらをたちを先に立てて鞆を負わせ、山川  
を岩根踏み分け通って国を求め、荒ぶる神を降伏させ、従わぬ人をも軟化させて掃討しお  
仕えもうして、(あきづ島)大和の国の榎原の畝傍の宮に、宮柱を太く立てて天の下をお治  
めになった皇祖たる天つ神の後継者だと、受け継いで来た大君の御代ごとに、隠れなき忠  
誠心を皇室に示し尽くして、仕えて来た祖先以来の役目である」と明言して授け給うた、  
その子孫たちが次々と伝えて、見る人が語り継ぎ、聞く人が模範にするだろうよ。貴重で  
高潔な名であるぞ。いい加減に心に思っ、かりそめにも祖先の名を絶つな、大伴氏の名を  
負うているますらをたちよ。

大伴家持(巻二〇―四四六五)



◎伊刀古名兄乃君居と而物尔伊行跡波韓國乃虎神乎生取尔八頭取持来其皮乎多と孫尔利八重疊  
平群乃山尔四月と五月間尔藥獵仕流時尔足引乃此片山尔二立伊智比何本尔梓弓八多婆佐孫  
比米加夫良八多婆左孫完待跡各居時尔佐男鹿乃来立嘆久頓尔吾可死王尔各仕牟各角者



御笠乃波夜詩 吾耳者 御墨垣 吾目  
良波 真墨乃鏡 吾爪者 御弓之弓波受  
吾毛等者 御筆波夜斯 吾皮者 御箱皮  
尔 吾完者 御奈麻須波夜志 吾佐毛母  
御奈麻須波夜之 吾美義波 御塩乃波  
夜之者矣奴 吾身一尔七重花佐久八  
重花生跡 白賞尼 白賞尼  
右歌一首為鹿述痛作之也

▽いとこ 汝背の君 居り居りて 物にいくとは 韓國の虎といふ神を 生け捕りに 八つ捕り持ち来 その皮を

疊に刺し 八重疊 平群の山に 四月と 五月との間に 藥狩 仕ふる時に あしひきの この片山に 二つ立つ 櫟が本  
に 梓弓 八つ手挟み ひめ鏡 八つ手挟み 鹿待つと 我がをる時に さ雄鹿の 来立ち嘆かく たちまちに 我は死ぬ  
べし 大君に 我は仕へむ 我が角は み笠のはやし 我が耳は み墨壺 我が目は ますみの鏡 我が爪は み弓の弓  
弭 我が毛らは み筆はやし 我が皮は み箱の皮に 我が肉は み膾はやし 我が肝も み膾はやし 我がみげは  
み塩のはやし 老いはてぬ 我が身一つに 七重花咲く 八重花咲くと 申しはやさね 申しはやさね  
右の歌一首は、鹿の為に痛みを述べて作りしものなり。

◆いとしい人、我が背の君が、ずっと家に居たままで、どこかへ行くというのは辛いという韓国虎とい  
う神を、生け捕りで八頭捕らえて来て、その皮を疊に縫って作り、平群の山に、四月と五月の間に藥  
狩にお仕えする時に、この片山に、二本立つ櫟(いちひ)の木の下に、梓弓を八張手に持ち、ひめ鏡の  
矢を八本手に持って、鹿を待つために私がいる時に、牡鹿が来て立ったまま嘆いて言うことには、たちま  
ち私は死んでしまうでしょう。大君に私はお仕えいたしましょう。私の角は御笠の飾り、私の耳は御墨  
壺、私の目は澄んだ鏡、私の爪は御弓の弓弭、私の毛は御筆の料、私の皮は御箱の皮に、私の肉は御膾の  
材料、私の肝も御膾の材料、私の胃は御塩辛の材料に。追い果てた私の身一つに、七重にも花が咲く、八  
重にも花が咲くと、申し上げて誉めそやして下さい。申し上げて誉めそやして下さい。右の歌一首は、鹿  
のために痛みを述べて作ったものである。

作者不詳(巻一六―四四六五)



◎於久夜麻能 之伎美我波奈能 奈能其等也 之久之久伎美尔 故非和多利奈能

▽奥山のしきみが花の名のごとやしくしく君に恋ひわたりなむ

◆奥山のしきみの花の名のように、しきりにあなたに恋い続けることでしょうか。

大原真人今城(巻二〇―四四七六)



◎安之比奇能 夜都乎乃都婆吉 都良とこ尔 美等母安可米也 宇恵互家流伎美

▽あしひきの八つ峰の椿つらつらに見とも飽かめや植ゑてける君

◆峰々の椿のようにつらつら、じっくり見たとて、飽きることがあるものですか、これを  
植えたあなたを。

大伴家持(巻二〇―四四八一)





◎梧桐日本琴一面 對馬結石山孫枝 此琴夢化娘子日 余託根遙嶋之崇巒  
晞跨九陽之休光 長帶烟霞逍遙山川之阿 遠望風波出入鴈木之間 唯恐  
百年之後空朽溝壑 偶遭良匠散為小琴 不顧質麗音少 恒希君子左琴  
即歌日 伊可尔安良武 日能等伎尔可母 許之良武 比等能比射乃倍 和  
我麻久良可武

▽梧桐の日本琴一面 對馬の結石山の孫枝なり この琴、夢に娘子に化りて曰く、「余、根を遥島の崇巒に託け、幹を九陽の休光に晞しき。長に煙霞を帯びて、山川の阿に逍遙し、遠く風波を望みて、雁木の間に出入す。唯百年の後に、空しく溝壑に朽ちなむことを恐れき。偶良匠に遭ひ、削られて小琴と為る。質麗くして音少しきを顧みず、恒に君子の左琴とならむことを希ふ」といひき。即ち歌ひて曰く『いかにあらむ日の時にかも音知らむ人の膝の上我が枕かむ』

◆大伴旅人が謹んで申し上げます。梧桐の日本琴一面（對馬の結石山の孫枝です。）この琴は私の夢に娘の姿となつて現れ、次のように言いました。「私は梧桐として遙かな島の高い山の上に根を張り、太陽のうるわしい光に幹を曝しておりました。いつも靄や霞を帯びては山川のくまぐまを歩みゆき、風に立つ波を遠くに眺めながら雁や凡庸な木々と交わっていたのです。ただ、百年の寿命の尽きた後には谷間で空しく朽ち果ててしまうのかと、そればかりを心配しておりました。ところが、幸いにも立派な工匠に出会うことができ、削られて小さな琴になりました。生まれつきが悪く、音の貧しいことは顧みず、君子のそばに置かれる琴になりたいものと、いつも念願しているのです。」そして歌ったのです。『それはいつの日のことでしょうか。琴の音を知る人の膝を私が枕にするのは。』

大伴旅人（巻五―八一〇題詞）



▽紅は移ろふものぞ橡のなれにし衣になほ及かめやも

◆紅というのは色褪せるものだ。橡染めの着馴れた衣にやはり及ぶことがあろうか。

大伴家持（巻一八一―四一〇九）



◎古人之殖兼 杉枝 霞霏霏 春者来良之  
▽古の人の植えけむ 杉が枝に 霞たなびく 春は来ぬらし  
◆古の人が植えたであろう杉に霞が棚引く。春が来たらしい。

柿本人麻呂歌集（巻一〇―一八一四）



ゆづるは（ユズリハ）

◎古尔 戀流鳥鴨 弓絃景乃 三井能上後 鳴濟遊久  
□古に恋ふる鳥かもゆづるはの御井の上より鳴き渡り行く  
★昔のことを恋い慕う鳥なのだろうか、ユズリハの樹のある御井の上を  
通って、鳴きながら飛んで行く。 弓削皇子（巻二―一三二）



まゆみ（マユミ）



◎南淵之 細川山 立檀 弓束纏及 人ニ不知所

▽南淵の 細川山に立つ檀 弓束巻くまで 人に知らえじ

◆南淵の細川山に立っている檀の木、成育して弓束を巻く時まで人に知られたくない。

作者不詳（巻七―一三三〇）

◎吾園之 李花可 庭尔落 波太礼能未 遺在可母

すもも（スモモ）



▽わが園の 李の花が  
庭に降る はだれのいまだ  
残りたるかも  
◆わが庭の李の花だろうか、  
庭に降った薄雪が  
まだ残っているのだろうか。  
大伴家持（巻一九―四一四〇）



しひ  
（マテバシイ）



◎家有者 筭尔盛飯乎 草枕 旅尔之有者 椎之景尔盛

▽家にあれば 筭に盛る飯を 草枕 旅にしあれば 椎の葉に盛る

◆家にあれば器に盛るべき飯を、旅の中にあるので、椎の葉に盛ることよ。

有間皇子（巻二―一四二）



◎安治佐為能 夜赦佐久其等久 夜都与尔乎

伊麻世和我勢故 美都 惠努波牟

▽あぢさゐの 八重咲くごとく 八つ代にをいませ我が背子 見つつ偲はむ

◆あじさいが幾重にも重なって咲くように、いよいよ久しい代までもお元気で

いてください、我が君よ。見てほめたたえるでしょう。 橘諸兄(巻二〇・四四八)



あぢさゐ (アジサイ)

【参考文献】

『万葉樹木園の栞』 和田仁ほか著・編 神奈川県立大和高等学校PTA 一九七八

『萬葉集』 鶴久 森山隆編 桜楓社 一九七七

『萬葉集一 新日本古典文学大系一』 佐竹昭広ほか編 岩波書店 一九九九

『萬葉集二 新日本古典文学大系2』 佐竹昭広ほか編 岩波書店 二〇〇〇

『萬葉集三 新日本古典文学大系3』 佐竹昭広ほか編 岩波書店 二〇〇二

『萬葉集四 新日本古典文学大系4』 佐竹昭広ほか編 岩波書店 二〇〇三

## 大和高校敷地内に植栽されている

### その他の万葉樹木



ツゲ

体育館  
入口前



あしび  
(アセビ)



つばき  
(ヤマザクラ)

